

坪井芳洲と薩摩藩

泉 彪之助

蘭学者芳洲坪井為春が薩摩藩の奥医師となり、島津斉彬の病床にも侍したことはすでに知られている。しかし任命の日時など、研究者の間で不一致があり、詳しいことは分かっていない。

著者は、芳洲と薩摩藩との関係を薩摩藩史料の側から検討し、その経緯を明らかにしようとした。鹿児島県歴史資料センター史料編さん室大平義行、鹿児島県立図書館永野正勝両氏の好意で同館所蔵の文献と史料を調査することが出来、いくつかの知見を得ることが出来た。また宇和島伊達文化保存会の好意で、坪井芳洲作成の島津斉彬容体書の黒田家記録(一三)と、これが添えられた黒田斉溥書簡の原本写真とを入手した。(四七)

今回の調査は、もともと年譜上の異同の決定など些末な事項を目的として出発したが、調査中に開明的な君主であった島津斉彬の業績に印象づけられ、薩摩藩医としての芳洲の経歴も、むしろ同藩における洋学振興の一環としてとらえるべきであると考えるようになった。

また最近、芳洲曾孫の配偶者で家系の研究者でもある斎藤祥男氏は、芳洲子孫の一家、河合家に所蔵された重要な史料(二一五)を発見された。その中には芳洲自筆のものも含まれ、著者は同氏の好意でその史料を参照することが出来た。

これらの結果を総括して報告し、批判を仰ぎたい。

一 薩摩藩奥医師となるまで

坪井芳洲は、元の名前を大木忠益といい、後に仲益と改め、薩摩藩に仕えるようになってから芳洲坪井為春と改名した。忠益の両親は大木三智（後に松翁）、たきで、三智は米沢城下から約三里越後寄りの小松という宿場に住み、駄医であった。従来三智は郷医といわれており、郷医とは米沢藩独特の身分で、俸禄は受けないが士分としての待遇を受ける医師のことをいう。その郷医と駄医との関連は、著者には未詳である。また実際には、三智は式人扶持三石の俸禄を受けている。^(二五)

忠益は地元で、水野道益（漢学）、小松来訪の平田有監（医学）、坂千松（漢学）らに師事した後、天保十三年、藩医の素堂堀内忠寛に入門、天保十四年五月に上京し、素堂の紹介で同年九月、坪井信道に入門した。坪井信道の日習塾における忠益の経歴は、詳しく知られているので省略する。

この間に三智の隠居願が許され、天保十四年三月二十七日に忠益が家督を相続した。^(二五)この後、三智が松翁と号したものとと思われる。同年五月松翁は忠益と共に上京し、江戸新肴町、後に松戸に住んだ。この上京の際、忠益も郷医の株を人にゆずり、隠居の身分となっているようである。^(二五)

大木忠益は日習塾塾監、後に塾頭となり、信道が病気になってからは寝食を忘れて看病した。信道の死去後、坪井信良を助けて塾生の教育にあたったことは、知られる通りである。^(二七、二八)

二 薩摩藩奥医師となった経緯

芳洲死去の翌年、『中外医事新報』と『東京医事新誌』に掲載された「坪井為春先生伝」（以下「為春伝」）では、薩摩藩に採用された理由として、薩摩藩では坪井信道を招こうとしたが、信道がすでに長州藩に招かれていたため芳洲が勤める

こととなったとして^(一六)いる。

また青木一郎氏は、芳洲を薩摩藩へ紹介したのは、薩摩藩から日習塾に入門していた足立梅栄であったとしている^(一八)。青木氏は、足立梅栄、安達棟栄の二つの表記をしているが、後に述べる「豎山利武公用控」には足立梅栄の名が出ており、この記載が正しいかと思われる。『坪井信道詩文及書簡集』によれば、足立梅栄の父(養父?)は、足立踏恕^(一八)で、従って足立踏恕、梅庵、梅溪の一家に属し^(一九)、この点も上の事実を支持する。足立踏恕は、武州の出身で島津家の御典医となり、江戸の定府士籍に列せられた。嘉永四年斉彬に従って入国したが重病となり、梅庵が後を継いだ。梅庵の長男が梅溪で、佐藤尚中に師事、元治元年薩摩藩開成所に任命、親兵付き軍医となったが退職し、初代の愛知病院長となった。後に西南戦争に参加した^(二〇)。青木氏は、足立梅栄の旧名を鈴木元徳としている^(二一)。

しかし芳洲の直接の紹介者が足立梅栄であったとしても、薩摩藩と坪井信道の間には種々の人脈があった。島津斉彬は多くの蘭学者と親交を結び、池田俊彦氏は『島津斉彬公伝』の中で、「当時の蘭学者という蘭学者はほとんど皆斉彬の知遇を受けないものはなかった程である」としている。とくに戸塚静海を抱え、信道とも親しく、また信道の義弟高野長英を重用した。芳洲はこうした人脈の中で、薩摩藩との関係が生まれて来たものであろう。

三 白金今里村薩邸植物园について

芳洲は正式に薩摩藩医となる前に、白金今里村にあった薩邸植物园に住み、兵書などの翻訳に従事したとされる。その年代は、「為春伝」では二十八歳の時(嘉永四年)^(二二)と、また仲田一信氏は嘉永四年、斎藤祥男氏は嘉永三年(嘉永二年?)^(二三)としているが、薩摩藩史料からは確定出来なかった。ただし「為春伝」の基となったと思われる、坪井信良筆の為春の伝記および年譜では、二十七歳、嘉永三年としている^(二四)。

島津斉彬の能力を高く評価する人たちの運動によって、老中阿部正弘らが斉彬の父斉興に隠居を示唆し、その圧力に屈

した斉興が斉彬に家督をゆずったのは嘉永四年であった。また嘉永二年から嘉永三年初頭の数月までは、斉興が斉彬派の家臣を処罰した嘉永朋党事件、いわゆる高崎崩れがあった。従って嘉永四年の方が可能性が大きいように思われるが、斉彬の蘭学者への援助や引き立ては家督相続前にも行われており、また嘉永朋党事件の舞台は薩摩であったので、嘉永三年説を否定することは出来ない。坪井信道は、嘉永元年十一月に死去しており、上に述べたように芳洲はその後坪井信良を助けて塾生の教育にあたっており、嘉永二年の可能性は少ないと思われる。

薩摩藩邸の植物園としては、斉彬の曾祖父重豪が別荘蓬山園の一面に作った独楽園が有名である。重豪は博物学を愛好し、独楽園は花園というよりむしろ植物園としての性格を持っていた。蓬山園は高輪薩摩藩邸にあり、現在の高輪プリンスホテルのあたりである。^(二二、二三)

薩摩藩は江戸に芝、桜田、高輪、田町などの藩邸を持っていたが、寛永十一年に京極老岐守から白金今里村の土地二五四二坪を購入し、これが藩邸となった。^(二三)この藩邸は通称白金御屋敷と呼ばれ、後に斉宣がこの藩邸に退隠した。^(二四)そのため

ある史料では斉宣を白銀老公と呼んでいる^(九)（一般に藩史資料には白金、白銀の両様に記載されている）。この藩邸の詳細は不明だが、斉彬がここで砲術練習をしたとの記録がある^(九)。この藩邸は薩摩藩記録に明確に存在し、小説にまで書かれている^(二五)。現在地が不明である。島津出版会が編纂した「しらゆき—島津忠重 伊楚子追想録」中の、幕末の薩摩藩邸リストに

も記録されていない。港区の郷土史家湊元昭氏の古地図などの分析を含む詳細な調査^(二七、二八)、齋藤祥男氏の島津家当主鹿島晃久氏との面接を含む調査^(二九)、港区立高輪図書館の協力などによって、港区の現在八芳園がある地域（白金台一丁目）の「島津式部御抱地」がそれであろうと推定された。島津式部は、薩摩藩の支藩佐土原藩の一族であるが、島津本家の土地がなぜ支藩の名義になったのか不明である。一つの可能性は、斉宣の死後、使用されていなかった藩邸を、薩摩藩の財政危機のために支藩に譲渡したということだが、史料、古地図の上でこの点は確認出来ず、想像にとどまっている。

後に芳洲は芝浜松町へ転居して塾を開くが、この間の薩摩藩との関係は明らかでない。（後述）

四 芳洲の薩摩藩奥医師任命の経緯

芳洲が薩摩藩奥医師に任命された年は諸説あるが、芳洲自筆の履歴書を始めとして多く安政元年説を取っている。

今回の調査で、島津斉彬の秘書の公用メモというべき「堅山利武公用控」(以下「公用控」)にこの経過が記載されており、安政元年九月二十九日に、坪井芳洲と改名し、同日奥医師に任命されたことが判明した。^(三〇) 堅山利武は斉彬の信頼した側役である。以下「公用控」の文章を記載する。

〔安政元年〕 九月廿九日

一 大木冲益事 此御方様江対シ坪井芳洲と致改名候、

一 右同事奥医師之場ニテ御番相勤候様、尤六人賄料、御役料之儀は、定府之医師同様被下候旨被仰付候 仰出、豊

後殿江相渡置候事」

「為春伝」は、薩摩藩奥医師への任命に際して、芳洲の米沢藩士としての立場と、薩摩藩への移籍とが調整がつかず、その便法として坪井芳洲と改名したと記している。前記の文に先立つ「公用控」の記載内容もそれを裏付けており、問題の難点は主として米沢藩にあったようである。前述のように、このころ芳洲は米沢藩士として隠居して、その地位を養子にゆづっているが、それでも移籍に抵抗があったことが「公用控」に見られる。

最近発見した芳洲の子、坪井次郎の訪問記では、次郎自身がこの経緯を語っており、上の説を支持している。^(三一)

斎藤祥男氏が指摘するように、坪井信道書簡の中ですでに芳洲という名が使われており、この号自身は早くから使われていたのかも知れない。

『斉彬公御事跡』では「是モ大木ノ塾ニ居タ時ノ事彼(人物失記。大鳥圭介?)ハ名高イ安政ノ大地震(注・安政元年十一月四日)ニ出合ッタ」「一日此江川ノ屋敷カラ使者ガ来テ『新銭座ノ屋敷へ来テ蘭学ヲ教ヘテ呉レ(中略)』ト大鳥ニ頼ンダ乃

デ彼ハ大木先生ニ話スト先生モ勸メルカラ行ク事トナッタ(中略)是ガ安政四年彼ノ二十六歳ノ時デアル」としており、^(三三)
薩摩藩奥医師となつた後も芳洲の塾は続けられており、また坪井芳洲への改名後も大木先生と呼ばれることもあつたよう
である。

薩摩藩の藩医職制の詳細は明らかに出来なかつたが、天明二年ごろの江戸詰奥医師は、本道九人、鍼六人、外科三人、
また参勤交代の行列に参加したのは明和二年には御側医師(後の奥医師)五人、表医師二人、寛政二年には奥医師七人(奥
醫師一人を含む)^{(三四)(三五)}であつた。しかし斉彬の奥医師には洋医四十名がいたとの記録もあり、^(九)詳細は未詳である。

『鹿兒島県史』は、奥医師は初め側医師といい、安永九年七月奥医師と改め、員数は十二人であつたとしてゐる。^(三四)しか
し「島津家列朝制度」には、安永二年に「表医師を表医師と表寄番医師に、奥医師を奥医師と奥寄番医師に分けた」とい
う記載があり、^(二四)制度が変転していることを伺わせる。

五 芳洲の薩摩下向

芳洲は薩摩へ下つて斉彬の奥医師として勤め、斉彬の臨終を看取つた後、江戸へ歸つて来た。斉彬の臨終に関すること
を除き、これらの年次を資料的に確定することは出来なかつた。

斉彬は安政四年四月江戸を出発、五月に鹿兒島へ到着するが、これが斉彬の藩主として三回目で最後の帰国であつた。
斉彬は翌五年鹿兒島で死去する。安政四年二月の「公用控」に、「芳洲が病後で同行を辞退したいといつてゐる」という
記事があり、^(二二)斉彬に同行したかは史料的には明らかに出来なかつた。しかし坪井家の家伝では芳洲が斉彬に同行したとし
ており、^(二二)多くの研究者も安政四年説を取つてゐる。芳洲の鹿兒島における居所その他の詳細は不明である。

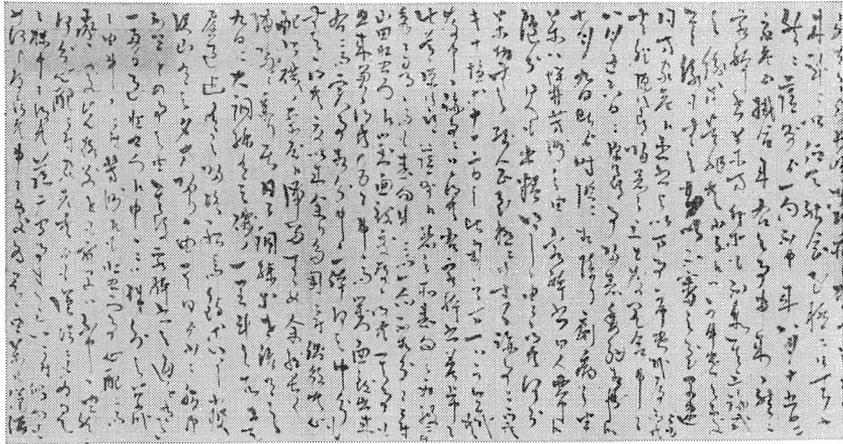


写真 1 伊達宗城宛，黒田斉溥書簡（部分）
 （安政五年九月十三日）
 宇和島伊達文化保存会所蔵

六 島津斉彬の発病・死去と芳洲作成の容体書

安政五年七月、島津斉彬は、天保山における練兵観戦の後、腹痛、下痢、血便、発熱、裏急後重を伴う症状を来たし、蘭方医坪井芳洲、漢方医朝稻三益、清水養正の治療を受けた。しかし症状が軽快せず、苦悶が続ぎ、循環虚脱を起こして、七月十六日死去（七）九した。（三）五 公式記録の上では七月二十日死去とされ、（三）三 対外的にもそのように発表された。

当時大老井伊直弼が一橋派の諸大名の反対を押し切って一橋慶福を将軍とし、また勅許を得ずに行なわれた日米通商条約の調印が発表されるなど、政治的に激動の時期であった。このような時に起こった斉彬の死去は種々の疑惑を呼び起こし、斉彬毒殺説も（三）七 生まれた。

斉彬の大叔父にあたる福岡藩主黒田斉溥は、側近吉永源八郎を薩摩に派遣して状況を調査した。吉永は斉彬の側近山田壮右衛門から詳しい事情を聞き、これを斉溥に報告した。黒田斉溥が、坪井芳洲作成の斉彬容体書を添えて、この調査結果を宇和島藩主伊達宗城へ送ったのが有名な秘密書簡である。（四）六 この中には、「葉は坪井芳洲之由」の文があり、「同人もずい分出精致し由に候えど

表 1 島津斉彬の病氣

診 断	診断・推定・記載者	史料・文献
コレラ	坪井芳洲	容体書
赤 痢	高木兼寛	「薩摩医人群像」より引用
赤痢または 腸炎ビブリオ []]	森 重孝	「薩摩医人群像」
痢疾+心因	「唱義聞見録」	「唱義聞見録」
心因加重	飯島志芽太	「島津斉彬の全貌」
毒 殺	海音寺潮五郎	「西郷隆盛」, 「史伝西郷隆盛」
毒殺伝聞	ポンペ	「日本滞在見聞記」

も」と芳洲を評価する一方、「後事には候えどもキナ塩など十一、二日ごろ用い候わば」とぐちめいた但し書きをつけている。この書簡は現在、宇和島伊達文化保存会に所蔵されており、同会の好意で入手した書簡写真の、芳洲の名が書かれた部分を掲げた。このキナ塩云々の項は、芳洲が斉彬の病氣をコレラとしているところから、ポンペが唱道した当時の通説に従って書かれたものである。しかしこの通説には、緒方洪庵の批判がある^(三三)。

斉彬の病氣を芳洲はコレラと診断したが、高木兼寛は赤痢と、森重孝は赤痢または腸炎ビブリオ感染としている^(七)。毒殺説は、斉彬死去当時からあったが、最近海音寺潮五郎が改めて取り上げ、注目を引いた^(三九)。近衛公からの密書を受け取った後、食欲が衰えて衰弱して死去したという心因説もあり^(四〇)、病氣が否定出来ないにしても心因の加重があったであろうとの説もある^(九)。斉彬の病氣、死因に関する諸説を表に示した。表中の「昌義聞見録」は、ある国学者の手記である。

松木弘安(寺島宗則)は、芳洲の治療法が不十分であったと批判しているが、病氣の本態も未決定である上、当時の限られた治療法の中で「薬効が足りない」とするのは、不適切であろう^(七)。

斉彬の病状について芳洲が作成した容体書の、伊達家に送られたものの原本は失われており、現在この系統のもっとも古い記録は、伊達家において作成された写しであると思われる^(一)。一方、島津家史料として伝えられた系統の

文書(二)があり、これがかつて存在した伊達家所蔵原本から写されたものか、別に島津家にその基本となった文書が存在した
ものか明らかでない。それらの史料の詳細は別稿で検討の予定である。

七 漢方医作成の容体書

これに関連して、漢方医作成の島津斉彬の容体書もあることを確認した。原史料は不明であるが、寺師宗徳著『贈正一位島津斉彬公伝』(明治四十一年)に掲載されている。(四一)以下全文をかかげる。

御容體書 後年為見 合記之置

太守様御事去ル九日晝後ヨリ御時候當ニテ御熱被為入御腰部之御痙攣時々御腹痛被為在御下厠度々有之候得共御快通不被
為入坪井芳洲拝診御発表劑カミツレ接骨木花茅根調進仕候

一同十日御容體書以後重之御模様ニ而御腹痛御強被為入御舌苔被為在御上リ別而御少御安眠不被為在晝夜御下厠三十度位
被為入候附朝稻三益清水養正拝診之上加味正氣散加葛根大黃調ヲ芳洲ヨリサソレツ煎カミツレ接骨木花茅根泡出差上候

一同十一日晝御発汗御相應ニ被為在御腹痛御痙攣少者御和ラギ被遊御血便ハ晝夜四拾度被為在上リモ昨日御同様三益養正
拝診御胸悶之御氣味被為在候附黃芩湯加葛根調進仕候芳洲御葉御同様差上置候

一同十三日御氣分御同様之内ニ而少ハ御開粥貳拾五匁程御望ニテ被召上終日七拾五匁餘被召上御味噌汁御豆腐少被召上御
腹痛御熱発モ御薄被為在御下厠晝夜三拾三度芳洲ヨリサアレツソ煎加砂仁藺唐木秀調差上候

一同十三日御氣分御通御被召上候モ昨日ヨリハ御重ミ御熱発モ至テ御輕被為在御藥黃花湯加桂根黃連調上御上リ晝夜百五
匁御下厠晝夜三拾二度芳洲ヨリハ矢張前方差上置候

一同十四日御肌熱御薄昨夜ヨリ時々御使中赤白御交被遊御完穀モ御交リ被遊御安眠モ不被為入御勞體被為在御音声モ御力

ナク候而御薬参苓白木散調進仕御灸治御中腕御氣海御天樞モ兩度被遊候御血便晝夜貳拾参度ニ而御減少ハ被遊候得共御上
リ至而御少ク益御勞體被為在御脈状至而御氣薄相伺候

一同十五日今朝ヨリ御脈益御氣薄御勞體御彌増御手足御微冷御血便晝夜十度被為入候夕方ヨリ御空煩之御模様被為在候附
大四君子湯加肉桂乾姜調進仕御灸治御同穴へ度々差上候得共益御氣脱之御容體附前方加附調上仕候得共御氣息御厥冷御増
御薬灸御奏効不被為在今朝六時御養生不被為叶何分奉恐入次第御座候此段申上候以上

七月

奥医師

注…文中、誤記と思われるものを左記に訂正した。

容體書以後重↓容體裏急後重。 サソレツ、サアレツツ↓サアレツフ(フ)。 十三日↓十二日。 黄花湯↓黄苓湯。 参苓白木散↓

参苓白朮散。 御中腕↓御中腕。 御勞體↓御勞倦。 御氣脱↓御虚脱。 前方加附↓前方加附子。

八 芳洲の帰府と蕃書取調所への任命

斉彬の死去後、後継者の忠義、その父久光によって、斉彬時代の政策は大きく改められ、洋学についての政策も変化し
た。

芳洲が薩摩を離れ、江戸へ帰った年月は史料的には不明であるが、多くの文献が斉彬死去翌年の安政六年説を取ってい
る。

芳洲は、万延元年、蕃書調所教授手伝に任命されているが、薩摩藩医としての資格は後年まで続き、自筆履歴書は慶応
三年までとしている。

薩摩藩の組織としての解体によって芳洲は藩医の資格を失ったとしている文献があるが、廢藩置県以前であることから

別の理由を考えた。

宮崎ふみ子氏は、蕃書調所―開成所において、最初幕臣に充分な洋学の人材がおらず、やむを得ず各藩の抱える洋学者を陪臣の身分のまま採用したが、種々の問題を生じたため、後陪臣が直参の身分とされたとして^(四)いる。

これらの問題は、(一)藩用による欠勤と辞任。a、不在による業務遂行上の支障。b、一時的帰藩の場合、期間中の勤務手当を無駄に支出することになる。c、出役御免の場合、洋学研鑽の成果が幕府に還元されなくなる。(二)秘密保持に關する不安、(三)陪臣と直参との給与格差などである。この解決策として(一)陪臣を直参の身分とすること、(二)後には幕臣中にも人材が育って来たため、陪臣を採用せず、直参の新規採用、(三)給与格差の撤廃、などの対策が取られた。氏は、「文久年間に採用された陪臣のほとんどが慶応三年末までに直参となった」と述べているが、このような事情は、医学所でも同様であったと思われる、芳洲が薩摩藩奥医師としての身分を失ったのはこのためであろう。討幕開始寸前の、不安定な政治情勢も関与したことが想像される。

〔考案〕

著者は、蘭学者芳洲坪井為春の薩摩藩奥医師としての経歴を、薩摩藩史料の面から明らかにしようとした。

薩摩藩史料は、維新後、島津家編輯所によってかなりの部分が整理公刊された。その後、島津家所蔵の史料が東京大学史料編纂所に寄付され、同所およびそのマイクロフィルムを所蔵する鹿児島歴史資料センター史料編さん室で整理刊行中である。

著者は一次史料を調査出来ず、すでに刊行されたものと、鹿児島県立図書館が刊本として所蔵する少数を調査した。藩史資料の上で確定出来た事実は、薩摩藩奥医師任命の日時など数件のみである。

膨大な薩摩藩史料中、著者が調査出来たのは一部分に過ぎず、今後さらに検討の余地があるが、薩摩藩史料は薩英戦

争、西南戦争、太平洋戦争の戦災で一部が失われ、また薩藩置県の際に藩政期の行政資料がかなり破棄されているので、(四三)
そうした点も考慮すべきであろう。

著者は、年譜上の異同を藩史資料の上で決定したいという末梢的な視点から調査を始めた。しかし調査中、藩主島津斉彬の開明性に魅せられ、芳洲の経歴も、薩摩藩における洋学振興という、より大きな観点から見直さなければならぬと考えるようになった。

第二十八代薩摩藩主島津斉彬は、幕末五賢侯の一人で、早くから洋学の振興に力を注いだ。坪井信道、戸塚静海、高野長英ら多くの蘭学者を重用、あるいは親交を結び、藩士を長崎、長州、適塾などに留学させ、また川本幸民らを招いた。また、藩における近代工業および軍事科学の確立に努力した。斉彬の施策は、その死後、主として財政的な理由から後継者たちによって中止されたが、しかし幕末日本における近代化の大きな刺激となった。

幕末における洋学が、(四四、四五)外的刺激により「医師の洋学から士族の洋学へ」変化し、その中心が医学から軍事科学へ移ったことはすでに知られている。しかし軍事科学の近代化には、前提として、自然科学、工業技術の発展と財政的能力を必要とした。そこでは、個人の知的活動の単純な集約ではなく、そうした前提を満たすことの出来る組織の形成が必要であった。いわば「個人の洋学」でなく、「組織の洋学」となったのである。軍事科学革新の中心が士族階級であったとしても、士族一般が上のような前提を組織化する力を持っていたわけではない。幕藩体制の下では、幕府および各藩の藩主のみがこうした組織力を持ち、その中で雄藩の藩主の役割が大きく、雄藩の藩主はいわば小規模な啓蒙専制君主の役割を果した。

このような役割は当然安定したのではなく、組織者としての先見性は、しばしば藩主の個人的嗜好に帰せられた。そのため政治情勢によって政策が変転したのである。薩摩藩における斉彬の施策が、彼の死後、中止されたことや、黒田斉溥が近代化への意欲をもちながら、藩内の政治的情勢のためそれを完全に実現出来なかったのがその例である。

雄藩藩主の指導による近代化路線は、公武合体派の退潮、薩長激派の擡頭によって政治的にも否定され、統一政権の確立による国家的近代化に置き換えられることになった。それは明治維新の性格の根幹にふれる問題であり、詳しくは述べないが、雄藩が結局は地方的政権としての性格を脱することが出来なかったこと、先前提に加えて、真の近代化には政治的、社会的体制の近代化が必須であった結果である。

しかしこの過渡期に雄藩藩主の果たした指導性は、国家的近代化への重要な基礎となった。その意味で限界はあったにしても高く評価すべきである。著者は、一洋学者の経歴に関心を持って調査を開始したが、重要なのは薩摩藩が組織として行った近代化であり、その一員としての洋学者の存在であろう。そうした意味で今回の調査は、得られた結果は多くなかったが、研究の視点を反省させる意義を持った。

(この論文の要旨は、平成三年六月一日、第九十二回日本医史学会総会で発表した)

この研究に多くの援助と助言を与えられた齋藤祥男教授、鹿児島県歴史資料センター史料編さん室・大平義行氏、鹿児島県立図書館・永野正勝氏、宇和島伊達文化保存会、岩崎育英奨学会、福井大学図書館、京都府立医科大学図書館、徳元昭氏、港区立高輪図書館・山口満館長、畠山記念館に感謝する。

文 献

- (一) 坪井芳洲「(島津斉彬) 御病症御診断書」(黒田家稿本)、宇和島伊達文化保存会の好意による。
- (二) 坪井芳洲「(島津斉彬) 御病症御診断書」、鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 斉彬公史料』第三卷、三二二頁、鹿児島県、一九八三(昭和五十八年)。
- (三) 日本史籍協会編・発行『島津家書簡集』八五頁、大正十二年、東京大学出版会、一九七二(昭和四十七年)復刻。
- (四) 黒田斉博「伊達宗城宛書簡(安政五年九月十三日)」、宇和島伊達文化保存会の好意による。
- (五) 島津家臨時編輯所著作兼発行『照国公文書』一二〇頁、一九一〇(明治四十三年)。

- (六) 黒田斉博「伊達宗城宛書簡(安政五年九月十三日)」、『鹿児島県史料 斉彬公史料』第三卷、三三二頁、鹿児島県、一九八三(昭和五十八年)。
- (七) 森重孝『薩摩医人群像』、春苑堂、鹿児島、一九七六(昭和五十一年)。
- (八) 池田俊彦『島津斉彬公伝』、岩崎育英奨学会、鹿児島、一九八〇(昭和五十五年)。
- (九) 鮫島志芽太『島津斉彬の全容』、ペリかん社、東京、一九八九(平成元年)。
- (一〇) 村野守治編『島津斉彬のすべて』、新人物往来社、東京、一九八九(平成元年)。
- (一一) 網淵謙錠『島津斉彬』、PHP研究所、東京、一九九〇(平成二年)。
- (一二) 斉藤祥男・私信。
- (一三) 「坪井芳洲履歴書」、明治十六年五月、斉藤祥男教授の好意による。
- (一四) 坪井信良筆「坪井為春伝記および年譜」(筆写)、斉藤祥男教授の好意による。
- (一五) 坪井為春関連資料(河合家蔵)、斉藤祥男教授の好意による。
- (一六) 「坪井為春先生伝」『東医新誌』四三三号、三七一—三八頁、四三四号、二九—三十頁、一八八六(明治十九年)。
- (一七) 青木一郎『坪井信道の生涯』、杏林温故会、一九七一(昭和四十六年)。
- (一八) 青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』、岐阜県医師会、一九七五(昭和五十年)。
- (一九) 南日本新聞社編『郷土人系(下)』、春苑堂、鹿児島、一九七〇(昭和四十五年)。
- (二〇) 仲田一信『埼玉医学校と日習堂蘭学塾』、浦和市尾間木史跡保存会、一九七一(昭和四十六年)。
- (二一) 上野益三『薩摩博物学史』、島津出版会、東京、一九八二(昭和五十七年)。
- (二二) 科学朝日編『殿様生物学の系譜』、朝日新聞社、一九九一(平成三年)。
- (二三) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 斉宣、斉興公史料』一〇四—一〇九頁、鹿児島県、一九八五(昭和六十年)。
- (二四) 「島津家列朝制度」、藩法研究会編『藩法集八、鹿児島藩上、下』、創文社、一九六九(昭和四十四年)。
- (二五) 佐藤雅美『薩摩藩経済官僚』、講談社、一九八七(昭和六十二年)。
- (二六) 島津出版会編集・発行『しらゆき』島津忠重 伊楚子追想録、一九七八(昭和五十三年) 俵元昭氏と港区立高輪図書館の好意による。
- (二七) 俵元昭・私信。

- (二六) 『港区古地図』 諸種。港区立高輪図書館と俵元昭氏の好意による。
- (二七) 港区立高輪図書館…私信。
- (二八) 「堅山利武公用控」(安政元年九月二十九日の項)、鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 斉彬公史料 第四卷』二九頁、鹿児島県、一九八三(昭和五十八年)。
- (二九) 「名家訪問録(坪井次郎)」『公衆衛生』第十二号、三三—三五頁、一九〇一(明治三十四年)。
- (三〇) 大島圭介(談)『斉彬公御事跡』、鹿児島県立図書館蔵写本。
- (三一) 『島津家奥侍等役割人名簿』(天明二年、安永七年などの記載あり)、鹿児島県立図書館蔵写本。
- (三二) 『鹿児島県史』第二卷、鹿児島県、一九四〇(昭和十五年)。
- (三三) 『斉彬公御逸事』全、山田莊右衛門自記、鹿児島県立図書館蔵写本。
- (三四) 伊地知季安編『順聖公年譜』一一六頁、温故知新齋主人、元治甲子八月、昭和三年謄写、鹿児島県立図書館蔵。
- (三五) 沼田次郎、荒瀬進共訳『ボンペ日本滞在見聞記』二五八頁、雄松堂出版、東京、一九八八(昭和六十三年)。
- (三六) 藤野恒三郎『医学史話』、菜根出版、一九八五(昭和六十年)。
- (三七) 海音寺潮五郎『西郷隆盛(一)』、角川文庫、一九八八(昭和六十三年)、『史伝西郷隆盛』、文春文庫、一九八九(平成元年)。
- (三八) 「唱義聞見録、薩中将」、野史台『維新史料叢書』三十五、雑三、東京大学出版会、一九七五(昭和五十年)復刻。
- (三九) 寺師宗徳『贈正一位島津斉彬公伝』、村野山人、一九〇八(明治四十一年)。
- (四〇) 宮崎ふみ子「著書調所」開成所に於ける陪臣使用問題』『東京大学史紀要』二号、一一—二十四頁、一九七九(昭和五十四年)。
- (四一) 藩法研究会編『藩法集八、鹿児島藩上』解題六頁、創文社、一九六九(昭和四十四年)。
- (四二) 中山茂編『幕末の洋学』、ミネルヴァ書房、一九八五(昭和六十年)。
- (四三) 沼田次郎『洋学』、吉川弘文館、一九八九(平成元年)。

(福井県立短期大学)

Hōshū Tsuboi in the Satsuma clan

by Hyonosuke IZUMI

The author investigated historical records of the Satsuma clan in regard to Hoshu Tsuboi, a physician to the feudal lord.

Hōshū Tsuboi lived in the Shirogane residence of the clan in Edo in 1850, and engaged in translating work for the clan. In 1854, he was appointed as a clan physician and attended the lord to Satsuma, the local residence, in 1857, where, next year, he served the feudal lord at the bed of his sudden and fatal illness, and left the clinical record on him. He returned to Edo, and in 1860 became a medical and linguistic specialist to the Tokugawa Central Government, but he retained his status to the clan until 1867.